

### 3.運営主体の違いによる子ども食堂の姿 —明石市と瀬戸市の比較から—

山下椋平

本稿の目的は、子ども食堂の姿を、運営主体の違いから比較し、それぞれの特徴を明らかにすることである。そこで私は、実際に子ども食堂に参加したことのある、明石市と瀬戸市を比較の対象とした。明石市と瀬戸市の大きな違いは運営主体の違いにある。明石市は、市の方針で子ども食堂への予算に2,000万円程充てているということもあり、子ども食堂の運営主体は行政が担っている。一方で、瀬戸市の運営主体は民間が担っている。行政との関わりがないわけではないが、日頃の活動は民間の団体とボランティアだけで行っている。

この運営主体の違いにより、子ども食堂の姿は全く異なる。どちらにもメリット・デメリットがあり、どちらも今の日本には必要な場所であることは間違いない。こうしたメリット・デメリットを比較しつつ、それぞれの子ども食堂の機能や、特徴を明らかにしていく。

#### 1.まんぷくこどもカフェについて

##### (1) 始めたきっかけと母体

テレビや新聞で子ども食堂の存在を知り、子ども食堂という活動に興味を持った。実際にすでに活動していた、ちくさこども食堂（キッチン ARAGUSA）を訪れ、活動内容を知り、感動した。それと同時にこれなら自分たちにもできるのでは？と思い、子ども食堂を開くことにした。孤食防止や居場所作りに取り組んでいる。

運営団体は、まんぷくこども食堂である。助成金をもらうために任意団体として活動している。まんぷく子どもカフェは屋号に当たる。

##### (2)参加日時と当日のメニュー

- ・5月20日 カレーライス、もやしと小松菜のサラダ、筍のきんぴら、ミルクかん  
この日は玉ねぎと筍の寄付があったため、使用した。
- ・6月17日 豚丼、ポテトサラダ、お吸い物、オレンジゼリー  
この日はジャガイモと米の寄付があったため、使用した。
- ・7月15日 カレーライス、サラダ、フルーツのヨーグルト和え  
この日はブルーベリージャムの寄付があったため、使用した。
- ・9月16日 親子丼、コールスローサラダ、みかんゼリー  
この日は卵の寄付があったため、使用した。

・10月21日 五目御飯、豆腐のお吸い物、エビとブロッコリーのサラダ、ヨーグルトゼリー

この日はカレーのルーと米の寄付があり、米は使用した。

食事提供の一時間前から準備の時間を利用して子どもと遊ぶ機会を設けた。この日は試しに開催するということがだったが、一時間前から子どもたちが数人集まっており、トランプや折り紙で遊んでいた。

・11月18日 カレーライス、キャベツのサラダ、フルーツのゼリーのせ

この日はかぼちゃ、さつまいも、米の寄付があり、前回寄付があったカレーのルーを使用した。

前回に引き続き、子どもと遊ぶ時間を設けた。この日から開催時間が昼に変わるため、事前に近隣にチラシを配布し、そこに準備時間に皆で遊ぶ時間を設けたことを載せていた。この日も数人の子どもたちが来ていた。

・12月16日 ツナコーンピラフ、かぼちゃのスープ、長芋のソテー、とりハム、りんごとさつまいもの甘煮、ケーキ

この日はじゃがいも、人参、米、りんご、長芋、ケーキの寄付があった。前回のかぼちゃとさつまいも、今回のじゃがいも、人参、りんご、長芋を使用した。

この日も子どもと遊ぶ時間を設けていたが、あまり集まらず、食事提供の時間の少し前に来ていた。

ボランティアが全体で30人ほどおり、数人ごとにグループ分けをしてグループごとに交代で献立を決めている。開催日までに担当のグループで集まり、お茶をしながら献立を決めている。まんぷく子ども食堂には食生活改善推進員に属する方が数人おり、食べ物にはこだわっている。安いからといって手を抜くことはなく、季節の食材を使用するなど、食育に力を入れている。

### (3)参加者の推移

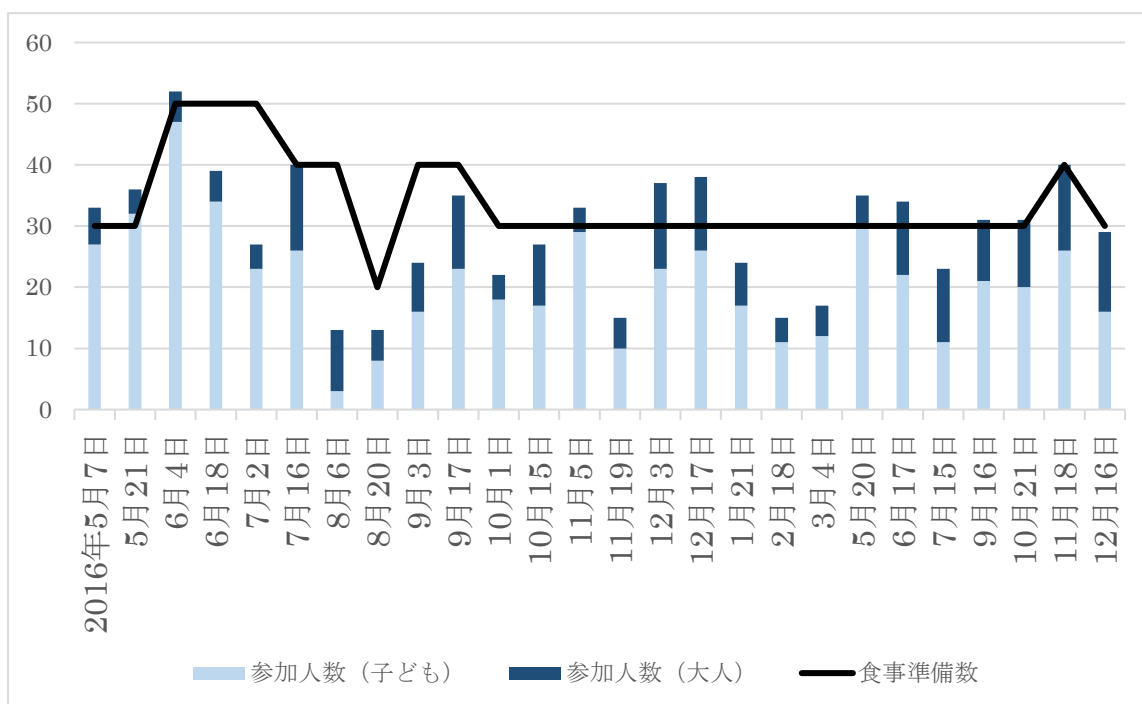


図1 まんぷく子どもカフェの参加人数と食事準備数の推移

オープンしたときは、予想以上に子どもが集まり、30食分準備していたが全然足りず、6月には準備数を増やした。しかしその後、参加人数は減少し、夏休みにはあまり来なかった。それからは30人前後で推移している。今年度は、昨年の経験を踏まえて夏休みの開催はしなかった。また、昨年は月に二回開催していたが、準備などの負担も考慮して、今年度は月に一回の開催となった。

ボランティアは毎回10人から15人程いる。グラフとしての変化はあまり見られないため、省略した。

### (4)参加者の居住地や様子

ほとんどが瀬戸市内からの参加者で、原山、八幡、陶原、萩山などの近隣の小学校からの参加者が多い。それ以外にも下品野や東山、幡山西、長根といった、少し離れた小学校区からの参加者もいる。多くは子どもとその母親で、たまに子どもが友達同士で来ることもある。

まんぷく子どもカフェは八幡台、原山台、萩山台という三つの自治区が重なる場所に位置しており、それぞれの地域には子ども会などはなく、高齢化が進んでいる地域である。周辺には県営住宅が多く、核家族や一人親家庭、独居老人が多い。

子ども食堂をオープンした頃は、子どもたちだけの参加が多く、いかにも問題を抱えていそうな子どもたちも見られた。徐々に参加者の様子の変化がいき、現在は家族での参加が多い。

#### (5)子ども食堂が抱えている問題

まず、アレルギーの問題が挙げられる。事前にメニューを告知できないため、アレルギーを持っている子がアレルギーのある食材ばかり出る日に来てしまうと、食べられるものがほとんどないということも起こり得る。チラシも配布しているが、配布量が多く、年に3回しか配ることができず、毎回メニューの告知をできないため、当日になるまでメニューがわからない。提供された食材を早めに使わなければならないため、実際に私たちも、当日になってメニューの変更を知らされることもある。

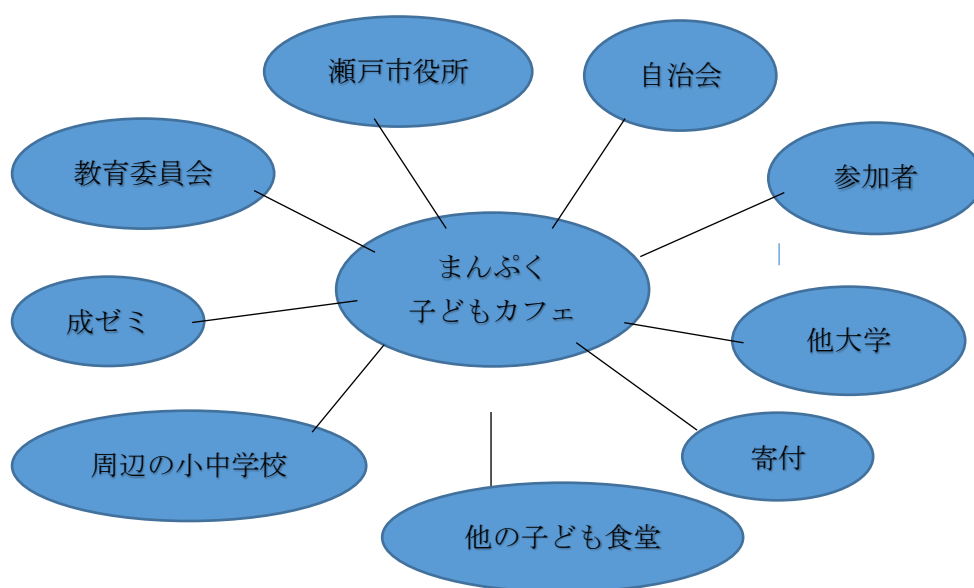
次に場所の問題がある。場所を借りて活動しているため、寄付の食材を保管する場所がない。また、スペースもあまり広くないため、食後に遊ぶスペースなどはない。

ボランティアの人数が増えてきているため、仕事のない人がでてきてしまう。

#### (6)継続するための工夫

市の教育委員会にチラシを配ってもらっている。ボランティア団体の集会でプレゼンし、表彰されている。ボランティアの方の仕事がなくなってしまうということもあり、10月から食事の準備時間に子どもたちと遊ぶ時間を設けた。これにより、食事を作る人と子どもたちと遊ぶ人に分かれて作業でき、人数の多さに関する問題は少し解決されたように思う。

#### (7)つながりマップ



まんぷく子どもカフェは開設の際に瀬戸市から助成金をもらっており、市長が見学に来たこともある。また、教育委員会を通して周辺の小学校にチラシを配っている。

他の子ども食堂（ちくさ子ども食堂など）の活動を見て活動を開始し、中京大学成ゼミをはじめとした様々な大学が調査や見学に訪れ、たくさんの寄付があることで多くの参加者が集まっている。これらの活動は周辺の自治会の理解と協力なしでは行えないものである。

## 2. 明石市と瀬戸市の比較

問題提起でも述べたように、本稿の目的は、子ども食堂の姿を、運営主体の違いから比較し、それぞれの特徴を明らかにすることである。明石市は行政が運営主体となっており、瀬戸市は民間団体が運営主体となっている。この違いは利点もあれば欠点もある。

まず、最も大きな違いだと考えられるのが、資金面の問題である。明石市では、子ども食堂への予算が約 2,000 万円ある。開設の際には 20 万円の助成金があり、年に 1 回、特別助成金として 5 万円が貰える。さらに、子ども食堂を開催する度に、2 万円支給される。このように、行政が主体であれば、まず資金面での問題はないだろう。逆に民間団体が主体である場合、資金面で悩みを抱えることも多いだろう。子ども食堂開設の際に市が助成金をくれることはあっても、継続的に支援してくれるというのはあまりない。個人や企業からの寄付という形での支援があれば良いが、それも継続的ではない。他の機関に助成金を申請している子ども食堂もあるが、助成金の申請は面倒なものが多いということも聞く。こうしたことを考えると、資金面では行政の方が安定しており、利点があると言える。

次に、場所の問題が挙げられる。場所の確保は子ども食堂開設時に最も悩むことの一つであるが、これも行政主体の方に利点があると考えられる。行政が主体であれば、行政関連の施設を利用できる可能性がある。たとえ利用できなくても行政の後ろ盾があれば施設を借りるのもあまり苦労しないはずだ。民間団体の場合、団体が子ども食堂に適した施設を所有していれば良いが、そうでない場合、場所の確保はなかなか難しいだろう。

さらに、カウンセラーやケースワーカーがいるかどうかも異なる。行政がかかわっていれば、そうした専門の人たちがいる場合はあるが、民間団体ではそうした人たちはあまり見られない。これはどちらに利点があるか、一概には言えない。専門の人がいれば、子どもの家庭の問題などがわかった時、すぐに対応できるだろう。そういった意味では行政の方が良い気もするが、そうした専門の人たちがいると、『子どもの貧困対策の場』というイメージが強くなり、子ども食堂への抵抗ができてしまう可能性もある。よって、専門の人がいることが、必ずしも良いとは限らない。

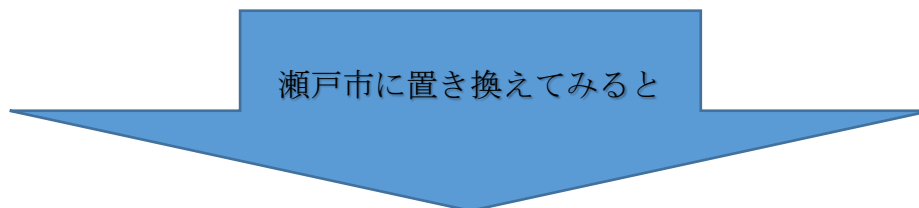
そして、実際に明石市と瀬戸市、両方の子ども食堂に参加して気づいたのは、参加対象者の違いである。明石市は市の取り組みの一つとして子ども食堂が開かれているということもあり、対象は子どもに限定されている。一方で、瀬戸市は民間団体が開いている子ども食堂であるため、対象を限定しておらず、子どもから高齢者まで、幅広い世代からの参加がある。参加対象者が異なれば、子ども食堂としての役割も異なってくる。子どもだけの参加だと、子どもたちも気兼ねなく遊ぶことができ、『子どもの遊び場』という雰囲気

がある。世代を問わず参加していれば、『地域の交流の場』という雰囲気になる。民間団体にはそれぞれの個性があるため、全ての子ども食堂が『地域の交流の場』というわけではないが、民間団体が主体の場合、それぞれの子ども食堂での特色がある。

明石市は一つの小学校区に一つの子ども食堂を作ろうとしているが、そこまでする必要はないと思う。小学校区ごとに子ども食堂を作り、ここの小学校の子はここの子ども食堂に行ってください、と選択肢を無くしてしまうのは第三の居場所として成り立たないと考えられる。逆に、子どもの人数が多い学区には二つ以上、子ども食堂を作っても良いと思う。参加したい子どもの数は多いのに、参加できる定員が少なく、行きたくても行けない子が出てくる。予約制にしてみると、自分で連絡できない子などは参加が困難になってしまう。そのため、行きたい子が必ず行けるように、子どもたちのニーズに合った形で、なるべく敷居を低く、誰でも気軽に参加できるようにすることが重要であると考えられる。このことを踏まえてまんぷく子どもカフェの規模の大きさについて考えてみた。まんぷく子どもカフェには様々な小学校からの参加者がいるが、距離が近く、参加人数が多いのは、八幡、陶原、原山、萩山の四つの小学校である。この四つの小学校の人数を足すと、平成29年5月1日時点で1,238人である。これらの四つの小学校以外にもいくつかの小学校からの参加者がいるが、1,238人という人数に対して30人規模の子ども食堂が一つしかないというのは少なすぎるように感じる。瀬戸市には他にも子ども食堂が数か所あるが、まんぷく子どもカフェから近い位置にあるわけではないため、子ども食堂一つでこれだけの人数に対応するのは不可能である。そのため、もう少し子ども食堂を市内に増やしても良いのではないかと考える。

子ども食堂に行きたいと考える子どもたちがどのくらいいるのかわからない以上、どのくらいの人数に対して、どのくらいの規模の子ども食堂が必要かはわからないが、明石市を参考に自分なりに考えてみた。明石市には28小学校区あり、平成29年5月1日時点で15,622人の小学生がいる。現在はまだ18小学校区にしか子ども食堂はないが、28小学校区全てに一つずつあり、各子ども食堂の定員が30人だと仮定すると、840人の子どもが参加できることになる。これは市内の小学生全体の約5.4%にあたる。これらを瀬戸市に置き換えて計算してみると、平成29年5月1日時点で6,944人の小学生がいる瀬戸市には、およそ12.5個の子ども食堂が必要だという計算になる。瀬戸市には20の小学校区があるため、二つの小学校区に一つか二つは必要だということになる。これはあくまでも子どもの支援に力を入れている明石市を参考に考えただけであるが、この計算は一つの目安になると思う。月に数回開催できればさらに参加できる人数は増えるだろう。図にすると次のようになる。

明石市	15622 人	28 小学校区	1 箇所につき 30 人と仮定⇒	840 人が参加⇒	全体の 5.4%
-----	---------	---------	------------------	-----------	----------



瀬戸市	6944 人	全体の 5.4%⇒	375 人が参加	1 箇所につき 30 人と仮定⇒	12.5 箇所必要
-----	--------	-----------	----------	------------------	-----------

瀬戸市には 3、4 箇所の子ども食堂しかないため、明石市を基準に考えてみるとまだ足りないように思う。明石市もまだ 28 小学校区全てに子ども食堂があるわけではないが、より多く子どもたちが子ども食堂に参加できるようにするためにはさらに数を増やす必要がある。

### 3.まとめ

行政と民間団体の特徴を比較してみると、どちらにもメリット・デメリットが存在し、どちらが優れているか、一概には言えない。行政が主体であれば、場所や資金にはあまり困らず、子どもの貧困対策としては意味があると思う。民間団体が主体であれば、地域の交流の場として機能し、地域の活性化にもつながるだろう。そういった意味では、行政主体の子ども食堂と、民間団体主体の子ども食堂の、どちらも必要であると考えられる。各小学校区に一つではなく、なるべく子どもだけでも行くことができる範囲にいくつかの子ども食堂が必要である。

子ども食堂は、子どもたちが困った時に逃げ込むことのできる場であると私は考えている。そのためにも、子どもたちに逃げ場の選択肢を与えることが重要だと思う。子ども食堂を、各小学校区に一つ設置し、小学校区ごとに、行くことのできる子ども食堂を限定してしまうと、学校内での人間関係などが子ども食堂へ、そのまま持ち込まれてしまう可能性がある。そうなってしまった場合、学校に行きづらさを感じている子どもや、友人関係がうまくいっていない子どもにとっては、子ども食堂も行きづらい場所になってしまう。そうならないためにも、複数の子ども食堂に行くことができるようにする必要がある。

行政と民間団体、どちらかだけでは全ての子どもたち、そしてその親のニーズには応えられない。その両方が地域に混在し、必要としている人たちが自分たちの意思で行く場所を選択できるような環境を整えることが重要である。

参考資料

明石市教育委員会，2017，『教育データ 平成 29 年度 市立小学校・中学校・特別支援学校  
児童生徒数』 <http://www.edi.akashi.hyogo.jp/kyoiku/data/pdf/H29jidouseitosuu.pdf>  
瀬戸市，2017，『瀬戸市立小中学校児童・生徒数 平成 29 年度 児童・生徒数一覧』  
<http://www.city.seto.aichi.jp/docs/2015120700035/files/jisouseito290501.pdf>